11500の署名と運動が市長を追いつめた

青少年の森　報告と学習のつどい　に34名

12月11日(日)鈴鹿青少年センターで「報告と学習のつどい」を開きました。「森を守ることができてうれしい」「みなさんのおかげ」「相手のオウンゴールではあるけれど、私たちが追い詰めたからこそ」など、喜びの声が語られました。後半では松岡武夫さんが「COP27と気候危機」というテーマで講演。世界と青少年の森はつながっている」と私たちの取り組みを激励しました。市長選に名乗りを上げた永戸孝之さんも参加し、最後まで講演を聞かれました。

本当に良かったと、ニュースを見た市外の友人からすぐに電話が入りました。みんなの森です。みんなのためにが第一です。

（松岡先生の）気候危機のはなし、えらいことです。怖くなりました。

（原　信子）

1年半、本当にご苦労さまでした（会の中心のみなさんへ）。大切な森を守れたこと、木を切られなかったこと、とてもうれしく思います。

鈴鹿の森を守った。それぞれの立場で力を合わせたことの成果だと感じました。

運動を大きく広げ、スタジアム建設をするなという仮処分申請という裁判所への訴えも、マスコミを動かすために役立った。

森を守るという目的で、それぞれの分野の人たちが全力を尽くしたことが、功を奏したものだと思いました。鈴鹿市民は良い経験をしたと思います。

（辻井良和）

自然を愛するものとして一本の木も切らずに森を守れたことはよかった、嬉しい！

私も何度か集会、「木を切るな」運動に参加し、青少年の森の前で看板をかかげ、大きな声をあげてきました。市民の反対運動、市議会の追及により、計画撤回に追い込めたことを喜びたい。

青少年の森は道伯山、道伯池、子どものころからの思い出があり、青少年の森になってからも、子どもが小さい頃、よく遊びに来た思い出もあり、三〇年前に亀山の「自然観察会」入れていただき、探鳥会や自然観察の会で訪れ、コロナ禍の中も時々友だちと訪れ、鳥を見たり草木の観察を楽しんでいます。

鈴鹿は文化面に対しても他市に比べ、劣っている。石垣池での探鳥会も年に一度だけ。青少年の森でも昆虫・きのこの観察会も年一度くらいしかない。自然に親しむ会を作って月一回ぐらい開催できればと思います。

（中川伸子）

自然資源は豊か。太陽光・海・地熱・風・・・考えれば再生エネルギーは潤沢にあり、国は有効に活用すべきだ。

自然破壊すればいずれ自分たちにしっぺ返しがくる。喫緊の課題として自然保護を主張していきたいと考えている。

（中村千代子）

2022年12月14日
鈴鹿青少年の森を愛する会通信 No.17
森のいのち SUZUKA
編集・発行　萩森繁樹
〒513-0012 鈴鹿市石薬師町354
090-4269-0965

○　市民の目的だった青少年の森の破壊が白紙になった、本当によかった。第二の破壊がおこらないことを祈ります。

○　CO2を減らしていくことの重大さは日頃の新聞で知らされています。結果としてどうすればいいのか。それは各々の人たちが少しずつ行っていくしかない。日頃SDGSを頭に入れて個人の意識しかない。国としては経済第一主義をやめること。サッカーチームの再生はありますか？

ありがとうございました。あきらめない！が本当に大事で、今回は半ばあきらめがちな私は大いに感謝、感動をいただきました。

仲間に報告、そして署名活動を一緒にしていただいた人たちにも報告します。皆さん、ありがとうございました。

皆さまの尽力に本当に感謝いたします。次世代に豊かな森を引き継ぐことができ、安心しました。

（田口）

報告と学習のつどいに参加してよかったです。

まず鈴鹿青少年の森の木が一本も切られずに守られたこと、反対してきて本当に良かったです。

COP27と青少年の森の講演、とても有意義でした。ありがとうございました。

（山本和子）

サッカースタジアム建設計画が白紙撤回になり、良かった良かったではないです。

末松市長の民主的でない政治姿勢が改められなければ、良かったことにはなりません。

市民に対する謝罪もなく、市民の求めていたことの一つも理解できていない事が大きな問題です。

（永戸孝之）

市民の声を聞く市政への転換を求め、立ちあがったる永戸さん。新市長誕生への期待が高まります。

森が守れてほんとによかった
鳥たちの森を守れてほんとによかった
遠い距離を飛んでくる渡り鳥たちが安らげる森を守れてほんとによかった
街の真ん中に自然の生き物たちが息づく森
空気を浄化し、騒音を遮り、強い風は穏やかにし、強い光には木陰を作り、季節の移ろいを感じさせてくれる
子供たちも、若者も、大人たちにも、
みんなに等しく安らぎと静けさと活気を与えてくれる公園
街にはそんな場所(公園)が必要です
50年の時を経て、育まれてきた木々は静かにしかし力強く、存在感を見せて
鈴鹿市の歴史の中で、私たち市民の誇る公園になっています
そんな森を守れてほんとによかった
悲しいのは、市長や知事がこの森の価値を一顧だにしてもらえなかった事
市民の反対を完全なまでに無視された事
残念でなりません

（12月3日　宮本英子）

サッカースタジアム問題の経過をふり返って

鈴鹿市議会議員　石田　秀三

◎計画は水面下、運営会社・市・県一体で進められた

２０２０年１０月、突然に「鈴鹿青少年の森にサッカースタジアム建設」との新聞記事が出て驚きました。末松市長が鈴木県知事、吉田社長とともに、ニコニコ顔で写真に収まっている記事に、私は「こんなもの出来るはずがないし、あの公園に作らせてはならない」と感じましたが、そのうちに議会にも報告か協議の話がくるだろう、その時に議論すればと考えていました。

その後、何の話もないままなのでスポーツ課に尋ねたりしましたが、説明する資料も何もないという話なので、計画は進んでいないと思っていました。ところが、水面下では計画の具体的な検討が行われていたのだということが、後で分かったのです。

◎「愛する会」が市民に呼びかけ、反対の声広まる

２０２１年８月２日、末松市長と吉田社長が記者会見で、スタジアム建設計画の具体的な内容を計画図面とともに９月着工、２３年２月完成のスケジュールで進めることを発表しました。この時も市議会には、各議員に発表文書を配布したのみでした。

私は、これは重大なことであり本腰を入れて取り組まなければと考え、直ちに私も世話人をしている鈴鹿革新懇話会の８月７日の世話人会に報告しました。それではまず、この計画について学習会をしようとなり、８月２２日に呼びかけて集まった２０人ほどでスタジアム計画に反対しようと発足したのが「青少年の森を愛する会」で、そこをスタートに署名運動などの活動を進めたことが多くの市民の共感を得て広がって、今日につながっています。

◎市議会でも６回つづけて質問

並行して私は９月議会の一般質問でこのスタジアム問題を取り上げようと８月11日に予定項目を「自然環境の保全について」として提出、県が進める「パークＰＦＩ事業」５haとサッカースタジアム計画５ha、合わせて10haの公園の樹木が伐採される環境問題として質問しました。

しかしパークＰＦＩ事業は、すでに６月県議会で審議され議決された案件であること、県が管理も予算も責任を負うものであることから、サッカースタジアム計画と同等に扱うと、かえって複雑になることから、以後はサッカースタジアムに絞って今回までのべ６回、連続して定例会ごとに質問を続けてきました。

◎明らかになった、運営会社のズサンで無責任な計画

その議論や調査の中で、いろんな事実が分かってきました。

第１には、アンリミット・ノーマークという運営会社・親会社が非常にズサンで無責任な体質であることです。21年10月に初めて行われた業者側の説明会で、アンリミテッドの吉田社長は、事業予定地の森林をただの「未利用地」と言い放って、ここが５０年かかって出来てきた自然の宝庫であるとの認識がゼロであること。

また私が質問でスタジアムの運営計画・資金計画を聞いても、「これは公共事業ではないので答える義務はない」と言い、県が公共性のある事業として使用料を無料にした経過も頭にない、重ねて計画を出すことを求められて「後ほど」とは言っ

たが、その後も何も出てこない、とにかくこれが経営者なのかと呆れるような態度に終始しました。

資金計画についても、22年3月にやっと議会答弁で、建設の総費用8億円(当時)は丸々全額借り入れる、自己資金ゼロ、返済計画は不明という非常識な資金計画しか言うことが出来ませんでした。

◎鈴鹿市長は、運営会社へ追随の態度に終始した

第2には、鈴鹿市の姿勢が、アンリミテッドの言いなり、追随に終始してきたという点です。末松市長は「鈴鹿市は当事者ではなく、あくまで応援する立場です」とは言うものの、調べてみたら一番最初からアンリミテッドと共に計画を進めるメンバーでありました。

三重県知事からアドバイスされて、県とアンリミテッドとの間に鈴鹿市が入る仕組みにすれば、公園の使用料は免除＝無料にするという案に安直に乗ってしまい、実はア社が立ち行かなくなったら責任はすべて鈴鹿市が負うという、謂わば連帯保証人の判を捺したのと同じであることに思い至らず、事業推進に手を貸してきました。もし先走って工事が着手されていたら、公園の現状回復のために莫大な費用を負わされることになったでしょう。1本も森の木を切らずに事業がストップしたことは、不幸中の幸いと言うべきものでした。

◎スキャンダルが判明しても、推進姿勢変えず

第3には、21年12月にア社元役員の塩見氏から、オーナーの西岡社長が首謀者となったサッカーチームの八百長未遂疑惑をネタに2500万円の口止め料を要求され、吉田社長が要求どおり支払ったというスキャンダルが明らかになったこと。それをJリーグから指摘され処分を受けたのに、ア社の吉田社長が辞任したもののノーマークの役員として居残ったまま、西岡氏は社長のまま、株式の譲渡は半年経っても不可能のまま、という企業体質が変わらないままでした。

末松市長はそれでも両社をかばい続け、言いなりになって、半年以上協定の破棄もスタジアム計画の撤回もせず、予定地に22年2月から工事用フェンスを立てさせ、いかにもスタジアム工事が進んでいるかのような工作に手を貸し、市民の目を欺いてきた。その責任は大きなものがあると、私は思います。

◎広がった市民の運動が、最悪の事態を防いだ

以上のように昨年8月からの経過をふり返ってみると、このサッカースタジアム計画は最初から無理があり、工事計画も、資金計画も、出来てからの運営計画もズサンそのもので、事業としては大失敗したのではないかと思います。

しかし、もしそれ行けドンドンで事業に着手されていたら、その結末はどうなったでしょうか。森の木は何千本も切られ、高低差のある予定地は最大15mも掘り返され、表流水も地下水脈もズタズタにされて自然の森の生態は大きく変えられたのではないでしょうか。

それが中途半端な状態のまま工事ストップで終わっていたら、それこそ目も当てられないことになっていたのでは、と私は思っています。

来年5月、パークPFIでサーキット側の道路沿いに出来るであろう、しゃれたカフェやレストランから見える風景が、豊かな森ではなく廃墟のような禿げ山になっていたとしたら、誰がそんな所に足を向けるでしょうか。

私たちの反対運動や市議会での追及は、1本の木も切らさずに森を守るという使命を、しっかりと果たしたのだと思います。これからも青少年の森の豊かな自然を守りながら、この公園に集い、楽しみ、次の世代の市民に伝えていきましょう。

森は守られた

（経過報告骨子案）２０２２．１２．１１

～森を守り、鈴鹿市に民主主義をとりもどす～

１、１１・２８記者会見を聞いて

（…市長は、またもや「業者のせい」にして逃げた）

・また、記者会見・発表だけですか！（市民の前で話して謝ってください！）

・この手法が「市民軽視」であることが今もって分かっていない末松市長！！

・１２月市議会でも再三の市長答弁を求められても全くの「沈黙」

①スタート時点から今まで市民・県民、利用者、周辺住民に相談もせず説明もして来なかった。民主主義のイロハを踏みにじった責任は重い。

②私たちの再三の抗議・公開質問状にもまともに応えずにここまで来た。

③サッカーファンに根拠もない期待を持たせ、熱い気持ちをもてあそんだ罪は重い。

④「にぎわい」「スポーツ振興」「防災」を口実にしてきたがそれも投げ出した。

⑤工事もできないのに7カ月フェンスで囲んで長期間森を荒らした責任と罪も重い。

・市長はアンリミ（三浦兄社長）と並んでの市民やファンへの謝罪会見が必要。（カズも）

・青少年の森に市長と業者の「謝罪広告」を掲示する。

・鈴木英敬氏のコメント（謝罪と事の始まりの説明）が要る。

２、私たちは森のさらなる利活用を変わらず進めていく

・速やかに、フェンスの撤去を業者に指示し、「森を自由に」すること。

・「鈴鹿のジブリの森」＝「鈴鹿青少年の森」を大切な憩い、遊び、学びの場として生物多様性の息づく森として守っていく。

・荒れたフェンス内の損失の調査を実施し、森を整備し、結果を公表する。

３、市議会での活動（石田氏、永戸氏）…別紙詳しく報告

・運動と呼応した議会質問

・市会議員との懇談、要請

４、裁判（訴訟グループから報告）

・地裁での攻防

・今後の控訴審

・高裁の判断、対応（１２月１６日第１回口頭弁論）

・被告、県の対応を詰める

・対市交渉準備

５、今までの運動の一定の総括（項目）

①署名活動の積み上げ・継続とその効果

②森の会議、共同代表制

③森を使った数々の学習会、レクの開催（植物観察、探鳥会、凧揚げ、レクなど）

④決起集会、報告集会、市役所や森でスタンディング

⑤「森のいのち」ニュース発行（平均月1回ペース、２００部発行）…№16まで

⑥財政面（市川）、カンパ、振込口座

⑦ＨＰの作成（橋詰）、電子署名

⑧情報公開、公開質問状、市交渉、懇談

⑨森利用者との連携（ランニングクラブ）、青少年センター職員の好意、「森の日記」

⑩学者・研究者との連携（自然誌の会、三重大学教員他）

⑪近隣自治会（南道伯他）

⑫歴史の調査（古老聞き取り）

⑬弁護士、環境法律家との相談、グリーンピース・ジャパンのアドバイス

⑭青年、高校生、ヤンママ・子どもたちとの協力

⑮支援団体からの応援・協賛（年金者組合、民主商工会など）

⑯メディアへの働きかけ、商業メディアの限界

⑰駅前商店会の協力（中野アイス他）

⑱市民団体との学習会（shining他）

⑲アンリミとの会談（1回）

⑳Ｊリーグへの情報提供

㉑ツイッター、フェイスブック

６、今後のこと

①裁判を中心とした闘い

②永戸さんの勇気と行動を支える（市長選）

③鈴鹿市に民主主義をとりもどす種々の運動とのこれからの連帯

④森で憩い、遊び、学習するとりくみ

⑤環境政策課との窓口

⑥パークＰＦＩの監視

⑦支援していただいた方々への報告、お礼

⑧森を愛する会の財政と今後と処理

⑨会の今後について

（文責　萩森）

白紙撤回は運動の勝利！

スタジアム計画の間違いは裁判で決着を！

2022.12.12
訴訟グループ　橋詰　圭一

末松市長は11月28日の記者会見で、スタジアムを望んでいた市民にお詫びしましたが、1万を超える署名に象徴される「森の木を切らないで」「スタジアムは森公園以外で」という市民の声について、一言もふれられていません。

そしていまだに、「スポーツ振興、地域活性化」に役立つ計画だったとして、計画自体は正しかったとしています。

この間の活動を通じて、森の木を一本も切らせなかったことは運動の大きな成果であり、喜びたいと思います。住民の声が行政を動かしてきた貴重な経験だと思います。

チーム運営会社の不祥事で事実上の「白紙撤回」になりましたが、反対運動がなければ、森の木は切られたが着工できない最悪の事態になっていたのではないでしょうか。市長に感謝してもらいたいと思います。

【転機となった活動】

この1年3ヶ月の活動を振り返って、転機となった活動が2つあります。

①いくつもの情報開示、質問・意見・要望を届け、着工を遅らせてきました。

当初図面にあった220台分の駐車場（約1ha）は誰が作るのか？県かアンリミか？という質問に答えられず、6haから5haに計画変更されました。

また、開発行為届出書（希少野生動植物の保護）など追求し、希少植物を移植するまでは木は切らないと約束させる・・など次々と質問・要望を届けてきました。

その結果、2021年9月着工予定だったのが、2022年2月9日着工予定にのびました。

②三重県知事を提訴。2022年2月4日「土地無償貸与は違法」と三重県知事を提訴しました。

その後情報開示した資料では、2月22日に県と市の担当者の協議に県法規部が参加し、「鈴鹿市とサッカークラブ運営会社が締結した協定書は一部誤解を招く表現がある」と話し会っていたことが分かりました。追加の協定、市の条例などで鈴鹿市が事業主体であることを明らかにしなければならず、事実上すぐに着工出来ない状況になりました。

【裁判闘争について】

行政には一定の裁量権が認められており、一度決めたことは簡単に変更しません。住民監査請求か行政裁判で間違いを明らかにしなければなりません。

しかし、行政裁判での勝率は10％程度と言われています。その一番の壁が「原告適格」と「出訴期間」です。

今回の裁判でも、2月14日に提訴してすぐ2月25日に、裁判長より「提訴期間についての釈明を求める」求釈明書が届き、それへの回答を3月10日に準備書面として提出しました。

①原告適格については、我々原告3名は、1万を超える署名に託された森公園を愛する人達の声を代弁するものである。

②出訴期間については、ニュースで知ったのは8月であるが、提訴を決意したのは、三重県知事が1万を超える署名者の意思を無視した2月4日である。これを貫き通し、裁判が始まりました。署名はそれを後押しする大きな力になりました。

【名古屋高裁へ】

津地裁は8月18日第3回公判で、「訴えを却下する」判決をくだしました。求釈明に答えて裁判が始まっ

たにも関わらず、被告人から同じ質問がされたことを理由に、裁判官がいったん問題ないと認めた提訴期日を持ち出して、違法行政活動の審議を行わず、提訴を却下したことは、裁判官の中立性と公平性を欠くものです。

9月7日、名古屋高裁に控訴しました。第1回公判が12月16日に行われます。

津地裁への訴状では次のように訴えています。

＝＝＝＝＝＝＝

本件紛争の原因は、被告らが公園利用者の意見も聞かず県議会及び市議会にも諮らず、公園利用者の権利を無視して一営利企業アンリミテッドの事業活動のために10年間もの期間の施設等の設置許可を行った被告の決定は非民主的であり、かつ、違法であることの確認を求める。

被告の行った公益性を理由にした使用料免除による施設等の設置許可は違法であることの確認を求める。

違法を前提とした公有地無償貸与による施設等設置許可の取り消しを求める。

＝＝＝＝＝＝＝

公園利用者の権利などを無視してすすめてきた政策の誤りがこの事件の本質であり、憲法で保障された国民主権を問う裁判です。行政がその誤りを認めるまで続きます。最後までご支援いただき、本当の民主主義を取り戻しましょう。

こんなにわかりやすく話してくれる人はいない

松岡先生は名古屋大学や皇学館大学で教授をしていた方。さぞかしむずかしい話だろうなと覚悟していたところ、むずかしい話を実にわかりやすく語っていただきました。

世界の気候危機は、いまやとんでもないところに来ています。シベリアの永久凍土が溶け出し、閉じ込められていた未知のウィルスが人類を脅かす、という話は斎藤幸平さんの本で知ったが、北極圏の氷が小さくなってそこに住むシロクマが困っている（餌のアザラシがとれない）という話は家に帰ってさっそく家族に教えてやりました。

2050年までにカーボンニュートラルを目指す。これは人間が排出するCO2と植物が吸収するCO2が差し引きゼロ（ニュートラル）になること。ニュートラルってそういう意味なんだ（と初めて知りました）。だったら木を切るなんてもってのほかではないか。

青少年の森の木を守ったことでどのくらいのCO2が吸収できるのか興味を持ちました。さっそく調べてくれた人がいます（グーグルってホントに便利）。杉の木323本で車1台分のCO2を吸収するそうです。青少年の森の木が5000本としてここを守っただけでは車20台分にも満たない。確かに小さなことだけど、気候危機に手を貸すのか、それを止めるのか、めざす方向は決定的にちがう。

松岡さんは「世界と青少年の森はつながっている」と言われたが、私たちの運動の意義を改めて教えられました。（スタジアム予定地を雑林帯だとか未利用地だとか言った人に、ぜひ教えてあげたい。）

人類は産業革命以来2390ギガトンのCO2を出しまくってきた。許されるのはあと400ギガトンしかない。毎年10ギガトンを排出しているからこのままでは10年でアウト。CO2を出さない自然エネルギーへの転換が急務。「人類にとって最大かつ緊急の安全保障は気候変動対策である」と松岡さんはしめくくられたが、危機感がまだまだ薄い日本国民（そういう私も）。松岡先生、また話に来てください。

（吉田一男）

ありがとう、みなさん
１年半にわたるいろんな取りくみ、
みなさんとの出会い、忘れません